

第3部

被爆者 受忍の果ての沈黙

④

戦後80年
終わらない
問い

16

「はだしのゲン」は子どもには残酷すぎるから読ませない方がよいというのは全然違ふと思う。子どもたちの被爆体験記「原爆の子」を編集した長田新（長野市出身）の孫、真紀さん（59）＝上田市＝は、広島市を訪れていた月12日、国際平和事業などに取組む同市のNPO法人「Anti-Hiroshima」スタッフの渡部久仁子（44）にこう語りかけた。はだしのゲンは、6歳の時に被爆し、父・弟を亡くした作者の中沢浩さん（2012年死去）の体験を基にした漫画。同法人は2011年、中沢さんと被爆当時の状況をたどりながら市内を巡るドキュメンタリー映画を企画した。渡部さんは、中沢さんについて「家族を殺され、戦争に巻き込まれた子どもとして、のまごとな怒りがあつたと振り返った。

「はだしのゲン」を子どもたちから遠ざける動き

被爆の実態 伝え

やけどや原爆症に苦しむ被爆者、子どもたちから遠ざけようとする動きがある。上田市の安、戦争や原爆に対する懸念を口にした。子どもを傷つけてしまつと大人が勝手に決めること、被爆の実相を伝えるこの作品たちの文化活動の幅を狭めて



漫画「はだしのゲン」を前に渡部久仁子さん（右）と語り合う長田真紀さん＝7月12日、広島市

はだしのゲン 1973年6月に「週刊少年サンデー」で連載が始まった原爆被害を題材にした漫画。主人公は広島市の国民学校で被爆。自身は倒壊して火に包まれ、父、弟が死にます。戦後は母や兄、人、生徒もいない、そして仲間となった原爆孤児らと助け合いながら、戦後の混乱期を生き抜く。被爆の実態をリアルに描写し、生活のために売春する女性や盗みなどを働く孤児にも登場する。